

# 韓国語学習者の意欲向上を目的とする学習法の試みとその検討 —グループによる学習に注目して—

林 河運

## 1. はじめに

大学生の学力低下が社会問題となる中、学習意欲向上<sup>1</sup>の重要性は言うまでもないだろう。特に大学全入時代とともに、韓国語教育における学生の学習意欲向上の重要性はさらに高まっている。学力、学習意欲、目的意識に大きく違いがあり、しかも多人数（35～45名）の学生からなるクラスにおいて、果たして学習意欲を高める授業、尚且つ活性化した授業などが可能であろうか。授業の活性化、学習意欲向上は教員だけではできない。いくら良い教材を作成し、内容の充実した授業を設計しても、一方通行的な授業展開では授業の活性化はもちろん、学習意欲向上は望めない。つまり、いかに有益な講義であっても学生側に学び取ろうとする学びの意欲がなければ、教員のことばは学生に響かないし、学習意欲はもちろん、授業が盛り上がることは期待できない。受け身で聞いているだけの学生から知的好奇心を引き起こし、学びへの意欲を高める工夫が授業の活性化と学習意欲向上には欠かせないのである。

本研究では、グループ学習による授業が韓国語における学習意欲を向上させ、授業の活性化にもつながるかどうかを検討したい。

## 2. 研究の対象

本研究に望ましい研究対象として、(1) 学生が韓国語Ⅰの履修者であること、(2) 本研究者の韓国語Ⅱの授業を受講していること、などの条件を満たす必要がある。特に、(2) に関しては、他の指導者の授業方針の影響が大きいため重要である。これらの条件を満たすクラスとして、島根大学で本研究者が担当している2013年度後期韓国語Ⅱ文法クラス（5クラス）を選んだ。クラスの人数は、月曜日の1限目クラス31名、月曜日の2限目クラス40名、水曜日の3限目クラス37名、水曜日の4限目クラス40名、金曜日の2限目クラス17名である<sup>2</sup>。つまり、5クラス合計で165名である。学年別には、一回生、二回生と三回生、四回生がそれぞれ148名、9名、4名、4名である。

また、島根大学では初修外国語としてドイツ語、フランス語、中国語、韓国語から一つ選択し、卒業するまで4単位<sup>3</sup>を取得すれば卒業できている。そのうち韓国

<sup>1</sup> Dörnyei(2001)は、学習者を動機づけるには、まずは教師と学習者および学習者同士の良好な関係を築くことなど、学習開始時に環境整えることが大切だと主張している。そして、整えられた環境で学習を始め、そこからさらに動機づけを維持し、保護する必要があるとしている。

<sup>2</sup> 授業者名簿に登録している名簿のうち、登録するだけで一度も出席していない学生、授業の途中から来なくなった学生、中間試験が終わって来なくなった学生、アンケートを取るとき欠席した学生、アンケートをまともに答えていない人はその人数の中に含まれていない。したがって、実際に受講している学生のうち、アンケートをまともに答えている学生だけの人数である。

<sup>3</sup> 全学部ではなく、医学部と生物資源学部は卒業するまで2単位取得すればよい。

語Ⅰは、一回生の前期に週2回、計60時間2単位で、統一テキストを使用し、読む・書く・聴く・話すという4技能のバランスのとれた初修外国語の運用能力の基礎を身につけることを目的としている。韓国語Ⅱは、1回生の後期に週1回30時間1単位の授業を2科目、計2単位取らなければならない。なお、学生が授業を選べるカリキュラムとなっていて、前期成績発表時に受講したいメニューの希望調査をし、クラス編成を行っている。現在実施しているメニューは、①文法②読む・書く③総合（前期の総合基礎を引き継ぐ授業内容）④検定対策⑤会話⑥聞くの6つである。そのうち、本研究者が担当しているメニューは、「文法」と「読む・書く」<sup>4</sup>のメニューである。両方とも授業中にグループによる学習があるが、グループによる学習のスタイルが違うため、今回は「文法」だけに絞って考察することにする。

### 3. 授業の方針と具体的な進め方

#### 3.1 授業の方針

まず、韓国語Ⅱ（文法）の授業方針を簡単にまとめると以下のとおりである。

- ①初級段階では学問より学習意欲を重視する。
- ②分かりやすく楽しい授業を心掛ける。
- ③授業の中心は初級段階での基本文法の理解とコミュニケーションのスキル向上に置く。
- ④文法事項はできるだけ公式の形で示し、文法事項によって異なる教授法の導入が必要である。

例えば、勧誘や提案を表す表現を習った時には、実際に勧誘や提案を体験できるように、移動しながら他のグループの友達<sup>5</sup>3～5名に韓国語で質問し合い、返事を韓国語で書いて提出するようにしている。

- ⑤その日に習った全てのことについて、振り返ってもらうよう90分授業二回に一回、シャトルカード（学生と教員の間の双方向性の授業の確立を目的に用いるカード）を提出してもらい、瞬時にフィードバックしていくことを心掛けている。これは、授業に対する学生の反応や理解度を確認する方法として、非常に有効であると考えている。実際に以下のような使われ方をしている。

- 質問をシャトルカードに書かせて、複数の学生が共通して疑問に思っている点については次回の講義で解説する。（共通しないものについては、個人個人のフィードバックも行う）
- シャトルカードを通して学生に授業についてのコメント（質問事項、その他講義に対する希望等）を毎回書かせる。講義に対する希望については、次回には気をつけ

<sup>4</sup> 韓国語Ⅱの場合は韓国語Ⅰと違って統一テキストではなく、各教員が自由に決めてやることになっている。

<sup>5</sup> いつものメンバーではなく、わざわざ他のグループの友達に限定して誘ってみるように指示している。そうすることによって、新しい友達あるいは他学部の友達とも仲良くなり、学習意欲の向上と授業の活性化にもつながると考えている。また、そのとき使う紙は授業のスタートの前に配っておく。

る（改善する）ようにしている。

- シャトルカードにその日の授業のポイントとなるものを（キーワード）を書かせる。
- 受け取ったシャトルカードに対して、とにかく全員に毎回一言ずつコメントを書いて返却する。この作業により、学生一人一人の顔と名前を覚えること<sup>6</sup>もできるし、瞬時にフィードバックもできるからである。

⑥授業中、教科書だけに頼らず、パソコンを使ったPPT資料を用いて、日韓の文化の違い、現代社会事情等を紹介したり、K-POPの歌を紹介したりする。これらすべて学生の韓国語に対する学習意欲を引き出すことを目的とするものである。

### 3.2 授業の具体的な進め方

①必ず、授業スタート10分前に教室に入る。なぜならば、学生の人数が約40名程度いるクラスが多いのと、プリント<sup>7</sup>を配布する時間がややかかるため、早めに教室に入りプリントの配布を行う。

また、これは学生と接する機会を増やすという意味もある。これに対して、名古屋大学高等教育研究センターのティップス先生からの7つの提案<教員編>（2005）では以下のように述べている。

集団の中の一人として見なされるときよりも、一人の個人として見なされるときの方が、学生は授業に対する帰属意識や責任感を持つものである。授業への参加度を高めるためにも、学生と接する機会を増やしてみよう。学生にとって自ら積極的に教員に接することは勇気がある行為なので、教員からきっかけをつくってあげることも大切である。

- ②毎回授業の最初に、単語テスト（ペーパーテスト）を行う（前回習った文法のチェック問題、日本語訳の問題、韓国語訳の問題などが含まれている）。（10分）
- ③単語テストが終わったら、その日に学ぶ予定の文法事項<sup>8</sup>についての概略とキーワードの説明を行う。（5分）
- ④その後、文法事項の詳しい解説<sup>9</sup>をした後、練習問題を通じてその日に習った文法事項を身につくようにする。このとき、授業者は学生一人一人見て回りながら瞬時にフィードバックしていく。また、練習問題の答えは学生に黒板に書いてもらうようにし

<sup>6</sup>筆者は、これも韓国語における学習意欲の向上と授業の活性化につながると考えている。

<sup>7</sup>テキストが決まっていないため、プリントの量が多い（毎回平均3～5枚）。なお、学生が板書をする時間が意外と短いため、板書しながら説明するところのプリントを配っておく。そうすることによって、授業に集中できるのはもちろん、一人で学習できるようにもなる。

<sup>8</sup>毎回二つの文法事項について学ばせている。しかし、希に三つを学ばせるときもある。これは、一回の授業で学ぶ新しい知識が多すぎると、やる気をなくしてしまう可能性が高いからである。

<sup>9</sup>あと、文法事項の解説が終わってすぐ次のところに進まなく、各自理解する、整理する時間を3分程度与えている。

ている。また、間違っているところに対しても授業者が直接直さず、「この文章には一か所間違いがあります。もう一回見て、自分で直してみてください」と指示する。その後、時間を与えて間違った答えを書いた学生自身の力で問題を解決させ、達成感を感じさせるようにしている。さらに、その答えも学生自身に読ませて、他の学生たちと一緒に読んでみる。(45分)

- ⑤練習問題が終わって授業の終わる20分くらい前に、4つのグループに分け、各グループにその日に学んだ文法事項と単語と文型が書いてあるフラッシュカード式の紙を配って机の上に並べるように指示する。その後、授業者が日本語で問題を提出し、その日本語に該当するカード(組み立てる)をメンバー同士で協力し合い、揃えて、先に手を挙げ韓国語で発音するグループを勝ちにする、という対戦式アクティビティ(筆者はカルタ式グループワークと呼んでいる)を行う。このときも、リーダーの一人がせえのという韓国語(シージャク)を発したら、グループメンバー全員と一緒に答えるようにしている。つまり、メンバー全員にできるだけ参加意識と達成感を感じさせている。(20分)
- ⑥次回まで覚えてくる単語の確認とともに授業者について2回音読させる。また、次回の授業の概略についてのアナウンスも行う。(5分)
- ⑦授業を終わる直前に旅先で使える表現を教えている。例えば、「<食堂で>お勧めは何ですか?(ムォガ チェイル マシッソヨ?)」のような表現である。(5分)
- ⑧時間の都合によって、できる場合とできない場合があるが、パソコンを使ったPPT資料を用いて、日韓の文化の違い、現代社会事情、K-POPの歌などを紹介するようにしている。(10分程度)これは、異文化の存在に気づくことによって、韓国語という言葉により深い興味を持ち、自律的な学習を促すことが目的である。

#### 4. 「グループによる学習」とは

近年、外国語教育では、「きょうどう」が注目されるようになってきた。そこで、ここではいくつかの先行文献から「きょうどう」がどのように定義され捉えられているのかを考察したい。

「きょうどう」の表記には「協働」「協同」「共同」があり、「同調」や「協調」と表記されることもある。現在のところこれらが一定の定義によって使い分けられているとは言えない。関田(2004)は、「きょうどう」の使われ方が人によってさまざまであるとした上で、「協同」を「個々のグループのメンバーが、グループの全員が一つの目標を達成するために、共になくってはならぬ存在として活動し合っていく」こととしている。そして、「協同学習」というのは、「自分の学びというのが誰か(多くの場合、クラスメイト)の役に立つと同時に、誰かの隣の人や仲間の学びが自分の役にも立たないといけない」と述べている。それに対して、単に人を集めてフループを作るだけのグループ学習を「共同学習」と定義している。館岡(2005)は、「きょうどう」を「協働(collaboration)」と表記し「互いに協力して何かを作り上げる創造的な活動を行うこととし、そこでは一人ではなしえなかった創発が起き

る」としている。

また、Barkely, *et al.* (2005) を邦訳した安永 (2009) では、cooperative learning を「協同学習」、collaborative learning を「協調学習」と訳した上で、両者の違いについて紹介している。さらに、collaborative learning を「協働学習」と訳す例がある一方で、佐藤学 (2013) では、これを「協同的学び」と訳している。最近では減ったが、「共同学習」や「協力学習」といった表現もある。こうした用語や概念の規定は大切ではあるが、あまり細かく分けると議論が複雑になりすぎるので、本研究では、関田の立場を援用し「個々のグループのメンバーが、グループの全員が一つの目標を達成するために、共になくてはならぬ存在として活動し合っていく学習」を「グループによる学習」と呼ぶことにする。

## 5. 「グループによる学習」の成否

「グループによる学習」の成否は、グループのメンバーの一人一人が「同じゴールを目指している」という認識を抱き、責任をもって協力し合い、グループの目標に向かって貢献できるかどうかということにある。換言すれば、グループのメンバーの中に、自分のやるべきことを果たさないうで、他のメンバーの努力をあてにし、成果のみをいただくという「ただ乗り」のメンバーがいれば、グループ全体の士気の低下を招き、学習そのものが崩壊しかねない。したがって、「グループによる学習」の成功の鍵は、「ただ乗り」をするメンバーを作らないことである。

## 6. 授業に「グループによる学習」の導入

「グループによる学習」が学習意欲の向上と授業の活性化に効果があると考えられるのであれば、韓国語の文法授業にもよく採択されてもよさそうであるが、実際はそうでもない。確かに、コミュニケーションの授業では、ペアワーク、ロールプレイ、スキットパフォーマンス、グループディスカッションなど、“グループによる活動”がよく見られるが、文法の授業では馴染みにくいのか、グループを活用した学習法を見聞することは少ない。しかし、学習意欲の向上と授業の活性化をしたければ、「グループによる学習」を行うのに異論はないであろう。

## 7. 教室と座席

グループによる学習活動であるから、こじんまりと机をくっつけて一つの島を作ることになる。したがって、机と椅子が動ける教室が望ましい。ただ、机と椅子が固定式の教室であっても構成メンバーが4名以下の場合には前の席の者が後ろを向いたり、通路を挟んで向き合ったりして何とか可能であるが望ましくない。教室については、授業者が容易にグループに近づき答えを確認できるような、スペースに余裕のある教室が好ましい。

## 8. グループの編成

「グループによる学習」でのグループの編成はどのようにすればいいのか、この学習法の

根幹を成すことだけに慎重に決めたい。考慮すべき項目は、グループの構成人数、グループ分けの方法、リーダーの選出と役割、グループ名の選出などがある。

## 8.1 グループの構成人数

グループにおいて適切に学習を進めるのに好ましい人数は学習環境と言語によって異なるであろうが、普通英語教育では10名を超えることはない。また、英語教育でのコミュニケーションのような授業では、広く情報が得られるし、ディスカッションも深みが増すが、その反面、各メンバーの発言量が減り、グループへの参加意識が弱まるであろう。人数が多ければその逆となる。

浅野(2002)は、「4～5名が好ましいが、6～8名でもなんとかやれる。3名は、全体の受講生数が20名以下で、グループ数がそれほど多くならない場合に採用できる、ただ、とてもうまくいくグループができる一方で、一人が外れたり一人で請けおったりする場合のフォローしにくさがある。6名以上になると、グループから外れる学生が出はじめる。10名を超えるとグループ内グループができるか、ほぼ関与しない学生が1～3名出現するので、それへの対応にも苦慮することになる」としている。

しかし、島根大学の初修外国語の韓国語の授業では一クラス40名前後のクラスが多く、現状大概8名前後であるが、最高12名のグループのメンバーがいるクラスが二つある。確かに、多すぎる部分もあるがその日に習った文法事項と新しい単語、そして、文型の入ったフラッシュカードを組み立てるのに6名は一人一人の負担が大きく、8名前後が適切であると判断したい。また、授業者が日本語で提出した問題に対するフラッシュカード<sup>10</sup>を揃えた後、先に手を挙げたチームにチャンスが与えられるので、グループを増やしメンバーの人数を減らすのは避けた。それは、グループ同士が同時に手を挙げた場合、じゃんけんで決めてもらう形のため、グループが多くなれば同時に手が挙がる確率が高くなるのを避けたかったからである。したがって、対戦式では4つのグループに分けた方が適切と判断した。さらに、2013年度の後期は筆者が担当している文法メニューの学生の人数が異常に多かったため、急遽、12名でも「グループによる学習」ができるように椅子に座ってやる人と座ったままではなく、参加できる位置に移動してやる人とに分けて全員参加するように工夫を凝らした。

## 8.2 グループの編成の方法

グループの編成には、学生番号順、席が近いもの順、学部ごと順、成績順、多様な方法があるであろうが、韓国語の場合は初修外国語であるため、英語学習のように英語力を考

<sup>10</sup> フラッシュカードは一つのグループに25枚～35枚程度である。ただし、一枚のフラッシュカード中に一つの単語ではなく、関連する単語が三つから四つ程度書いてある(しかし、助詞は一枚に一つ書いてある)。また、各単語ごとに日本語訳は書いてあるが、活用形は書いてないのでフラッシュカードを揃えるのは容易ではない。例えば、「友達と一緒に映画を見に行きます」のような問題を解くためには、「友達」「～と」「一緒に」「映画」「～を」「見る」「～しに(目的)」「行く」「～です・～ますの活用形」の九枚のフラッシュカードが必要となる。

慮した編成ではなく、各学部<sup>11</sup>ごとに、そして男女の割合を考慮し均等に分けた方が適切と判断した。また、明らかにレベルが落ちるグループの場合は授業者の判断のもと、少数ではあるものの瞬時にメンバー交代をおこなった。

### 8.3 グループのリーダーの選出とグループ名の選出

#### 8.3.1 グループのリーダーの選出

グループによる活動には取りまとめ役のリーダーが必要であり、グループのメンバーの人数が多いほどリーダーの役割は重要である。最近では、「協同学習」などによく見られるように、各メンバーの公平な参加責任を重視し、リーダーシップも分け持たれるべきであるとの考え方が好ましいとされている。

本研究でのグループのリーダーの選出は、一回目の授業（オリエンテーション）の時にグループ分けをし、メンバー同士で話し合っ決めてもらっている。しかし、グループによる学習をやっていくうちに、能力の高い学生がリーダー役をするように促している。それは、初修外国語の韓国語の授業では言語習得を目標とするものなので、グループ内の能力の差は歴然としており、能力の高いメンバーが能力の低いメンバーに刺激を与えたり、アドバイスをしたり、教えたりするという方法を取る方が好ましいと判断したからである。

#### 8.3.2 グループ名の選出

グループ名の選出はグループのリーダーの選出と同様で、一回目の授業（オリエンテーション）の時にグループ分けをし、メンバー同士で話し合っ決めてもらっている。このとき、せっかくなので韓国と韓国語に関連するものに限って決めてもらうことにしている。例えば、「キムチ」、「ソウル」、「サムソン」、「少女時代（ソニョシデ）」、「KARA（カラ）」のようなものがある。毎回の授業の時にグループ名で呼ばれるので、この単語だけは時間が経っても記憶に残るし覚えられるからである。

## 9. グループ間の競争

教育の現場ではあからさまな競争はタブー視する部分もあるであろうが、ある程度の競争は学習者に刺激を与え、やる気を出せるようにするので学習意欲の向上と授業の活性化により起爆剤と考えている。また、一人一人ではなくグループ間の競争は人間関係が気まぐずになる恐れもないし、学習者はゲーム感覚で楽しく学習できるのであろう。

さらに、日本人であれば他人に迷惑をかけたくないという気持ちが強いのと、誰しも負けたくないという気持ちはあると思われるので、筆者はその点を良い意味で利用したいと考えている。

---

<sup>11</sup> 島根大学の2012年度までは、学部ごとの韓国語の成績順が法文学部、教育学部、生物資源学部、総合理工学部の順であった。なお、医学部は2013年度から韓国語がスタートしたため、ここには入っていない。

## 10. 「グループによる学習」での留意点

「グループによる学習」での留意点は、岡坂(1991)にも述べられているように、「授業者は、グループによる学習においていったい何を目標とするのか」である。つまり、学習者に学習目標と達成目標をしっかりと説明する必要があるし、学習者が何をすべきかがはっきり分かるように具体的な教示が大切である。

## 11. 「グループによる学習」に対する学習者の評価

学習者に「グループによる学習」について、次のような項目を設けてアンケート<sup>12</sup>形式で尋ねたところ、以下のような結果を得た。回答者の合計は165名(男:98名、女:67名)で、質問2と質問3は複数回答である。

表1. 「グループによる学習」の可否

質問1 「文法」の授業に「グループによる学習」は？	回答数	%
①よい	138	83.6%
②よくない	3	1.8%
③どちらとも言えない	24	14.5%

上記の表1から分かるように、「文法」の授業に「グループによる学習」の導入を「よい」と答えたものが全体の8割を超えていることが確認できる。また、「どちらとも言えない」を合わせると98%にも達していることになり、この学習法が学習者に圧倒的に支持を得ていることが分かる。

表2 「グループによる学習」を「よい」とする理由

質問2 質問1で①または③と答えた人、その理由は？	回答数	%
①従来と違う方法で面白いから	40	14.5%
②リラックスした雰囲気楽しく学習できるから	81	29.5%
③話し合ううちに韓国語(内容)に関する興味を深めるから	19	6.9%
④友達と協力してやれるから	53	19.3%
⑤友達同士で互いに分からない点など聞きやすいから	17	6.2%
⑥刺激を受けて、よく学習するようになるから	17	6.2%
⑦対戦式なのでやる気が出るから	42	15.3%

<sup>12</sup> 本研究でのアンケート用紙の内容は、高橋寿夫(2008)のアンケート用紙を援用し筆者が修正・加筆したものである。



<p>⑧その他（具体的に書いてください）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●眠くならない。</li> <li>●テーマを再確認でき、発音も聞けるから。</li> <li>●瞬間で答えを出すので身につきやすいから。</li> <li>●いいけど、人数が多くて見えないからもう少し人数が少ないとちょっといいと思う。</li> <li>●人数が多すぎてなかなかみんなが参加しにくい。</li> <li>●新しい友達が増えるから。</li> </ul>	6	2.2%
---	---	------

上記の表2から分かるように、「文法」の授業に「グループによる学習」を「よい」とする第一理由として、「リラックスした雰囲気楽しく学習できるから」を挙げていることが観察された。これは、「リラックスして楽しく学習できる」という授業環境により、学習者は緊張感から解放され、自発的に学習に取り組むことができ、学習意欲も高まって授業の活性化にも繋がったのではないかと思われる。

次に、第二の理由として、「友達と協力してやれるから」がほぼ2割近く確認された。これは、「グループによる学習」の特徴の一つで、「社会性を育む」という意味合いがある。協力しないと他の人に迷惑をかけてしまうという心構えから積極的に授業への参加にも繋がりが、それが授業全体の活性化を生むのである。また、一人で学習するより、気軽に組み合わせて楽しく学習できるからであると考えられる。

これを裏付ける学生の自由コメントを以下に一部紹介する。

- グループだと楽しく学習できるのが良いと思いました。
- グループでやるのは楽しいから韓国語に興味があわくし、授業内容が頭に入りやすい。
- 皆で楽しく協力できて良い。
- グループによる学習だと気軽に組み組めるのでいいと思う。
- やっていくうちにやる気が出て、楽しかったです。黒板の方を見ているだけでは友達と協力して学習できないので、顔を向け合わせて勉強するのはとてもいいと思います。

また、次に続くのが「対戦式なのでやる気が出るから」である、これは、学習者に刺激を与え、やる気を起こさせつつ、ゲーム感覚で楽しく学習できるので授業も盛り上がり、授業の活性化にも繋がるのである。

これを裏付ける学生の自由コメントを以下に一部紹介する。

- ゲームみたいで勝ち負けもあり、とても楽しいです。
- チーム戦楽しく勉強できてます！
- やる気が出るので、韓国語が頭に入りやすい。

しかし、「文法」の授業に「グループによる学習」を「よい」とするものの、その他の意見として、以下のようなコメントもあった。このグループの人数編成については今後改善の余地があると思われる。

- いいけど、人数が多くて見えないからもう少し人数が少ないともっといいと思う。
- 人数が多すぎてなかなかみんなが参加しにくい。

表3「グループによる学習」を「よくない」とする理由

質問3 質問1で②または③と答えた人、その理由は？	回答数	%
①友達間の勉強では不安だから	2	8.7%
②グループで学習する自体が好きではなく、なじめないから	5	21.7%
③時間をかける割には能率が上がらないから	9	39.1%
④先生に当てられる心配もなく、サボるようになるから		
⑤グループに協調性がなく、覇気にかけるから	1	4.3%
⑥グループのメンバーが気に入らなくてやる気が出ないから		
⑦その他（具体的に書いてください）	6	26.1%

上記の表3から分かるように、「文法」の授業に「グループによる学習」の導入を「よくない」とする第一理由として、「時間をかける割には能率が上がらないから」を挙げていることが観察された。これは、今回筆者が担当している文法クラスの学生の人数が異常に多かったため、全員参加するように工夫を凝らしたものの、グループのメンバーの人数の多さに対する意見の結果が出たのではないと思われる。これに対しては、授業者が常に気をつけなければならないことである。

しかし、ある意味「グループによる学習」においてはやむを得ないことであると考え。学習意欲の向上と授業の活性化のためには多少の能率の悪さは犠牲しなければならないであろう。

次に、比率が高かったのが「その他（具体的に書いてください）」で、詳細のコメントは以下のとおりである。

- グループでやる必要性が分からない。個人でやった方がいいと思う。
- 学習面ではいいと思うが、グループ間の競争で結果が成績に反映するのは、個々の能力と見合った成績をつけれないと思うから。
- 人数が多すぎる。
- グループ毎に実力差が出るから。
- グループでやっても文法を覚えられたとはあまり思わないから。
- 友達がなくて人見知りを発揮したから。

ここでも、グループ内のメンバーの人数が多すぎるというコメントがわずかではあるものの、出たので、今後さらなる工夫と改善が必要となる。また、「グループ間の競争で結果が成績に反映するのは、個々の能力と見合った成績をつけれない」というコメントについては、成績に反映<sup>13</sup>しないと学習者がやる気を出さないので、やる気を出させるための手法である。

表4「グループ間の競争」の可否

質問4 「文法」の授業にグループ間の競争は？	回答数	%
①よい	125	75.8%
②よくない	5	3.0%
③どちらとも言えない	35	21.2%

上記の表4から分かるように、「文法」の授業に「グループ間の競争」を「よい」とする答えが75%を上回っているのが分かる。これは、学習にあたって適度な競争は学習者に刺激を与え、やる気を起こさせ、学習意欲の向上と授業の活性化にも繋がるということを裏付けていることになるのである。「どちらとも言えない」まで合わせると、97%にもなる。つまり、この対戦式の学習法が学習者に受け入れられている証拠とも言えるであろう。ただし、点数で競い合う限りは、採点は公正に行わなければならないが、他の人に馴染めない、対戦式に向いていない学習者に対しては的確な採点をするのが難しいところがある。これに点に関しては、さらなる工夫が必要であろう。

表5「グループによる学習は勉強（理解）に役に立ったかどうかについて」

質問5 「文法」の授業に「グループによる学習」は役に立ったかどうか？	回答数	%
①役に立った	115	69.7%
②役に立っていない	5	3.0%
③どちらとも言えない	45	27.3%

「文法」の授業に「グループによる学習」は勉強に役に立ったかどうかについての質問の結果は、上記の表5から分かるように、「役に立った」と答えた学習者の割合が約7割程度確認された。これは、筆者が実際におこなったグループによる学習法が、学習者の韓国語に対する学習意欲の向上と授業の活性化に役に立つ学習法であることを裏付けている。

以上の結果を踏まえてみると、さらなる工夫、検討、改善すべき部分は多々あるものの、「グループによる学習（対戦式）」という学習法が韓国語に対する学習意欲の向上と授業の活性化

<sup>13</sup> 島根大学の初修外国語の成績をつける場合、中間試験が40点、期末試験が40点、平常点が20点で100点満点にする。この平常点は授業者が決められるものであり、授業者によってわずかではあるが配点も様々である。そのうち、筆者の場合は単語テスト（小テスト）が10点、出席点が5点、普段の授業態度が5点である。この普段の授業態度のうち、2点がグループ対戦による点数である。

に有効であることを示唆していることになる。

## 12. 学習者の自由コメント

アンケートに併せて「グループによる学習」を体験してみたの、率直なコメント（感想、要望など）を書かせたが、そのうちいくつかを抜粋して以下に紹介する。

< positive 的なコメント >

- 紙で文章を組み立てるのが面白い。
- 偏るのは仕方ないとして、文の組み合わせを瞬間的にするのは力が付くと思う。
- やる気が出るので、韓国語が頭に入りやすい。
- 楽しくて好きです。
- グループワーク自体はその日の文法を実際に使ってみることができてよい練習になると思う。
- 違う学部の人とかかわるきっかけになるし、ゲーム感覚で韓国語を学べている気がして楽しい。対戦式なので、自分から積極的に学ぼうとする意欲が生まれる。
- 理学の座学ばかり普段やっているの、グループワークは変わっていて面白く学習できます。
- 楽しみながらできていいです。
- 自分の分からないところが分かる。
- グループワーク、すごく盛り上がるし楽しいです。
- その日の授業の復習がみんなできて、よかったと思いました。
- 友達と協力しあえるので良いと思います。
- 文法が分かり、ほんの少し韓国語が理解できるようになった。
- 楽しく文法を学ぶことができた。
- その日に習ったものを復習できたからよかった。
- 分からないところなど聞きながらすることができてよかったです。
- 同じ文法のクラスの人と仲良くなれてよかった！
- 自分で考えるようになるので、良かったです。
- 学習を通して知り合いが増えたので良かった。
- やっていくうちにやる気が出て、楽しかったです。黒板の方を見ているだけでは友達と協力して学習できないので、顔を向け合わせて勉強するのはとてもいいと思います。
- 普通の授業だと、100%眠たくなってしまうのでグループの方が好きです。
- 協力して学習できるので、なじみやすい。
- 特にパッチムの発音の練習になった。
- 楽しく学習できて好きです。読む訓練にもなって良いと思うし、班のチームワークも上がっていくのが楽しいです。
- 他の授業ではないことだったので、問題を正解した時の達成感や他のグループに負けた

時の悔しさが、自分にとって良い刺激になっていると思いました。

- 自分のグループが勝てた時はすごく楽しかった。
- 答えるときに全員で答えるなど、発音したりして楽しく覚えられるから。

< negative 的なコメント >

- 理解できていない人が、グループワークを通して理解できるようになっているかは少し怪しいです。
- 読む人が限られている部分ができる人とできない人の差を産んでいると思う。
- カードをもう少し小さくしてほしい。
- グループのパワーバランスを均一にしてほしいです。
- 徐々にグループの人とも話せるようになってきたが、話せるようになるまでのコミュニケーションに苦労した。
- 中心となるメンバーが進めている感じ。中心となるメンバーは勉強して分かっているからである。なので、自分も中心メンバーになるために頑張っていきたい。
- これは、みんなのやる気が必要だと思った。
- グループ学習の時のカードが多すぎて合っているカードを探すだけで一苦労する。
- チームが勝てない。
- だんだんグループにも馴染めるようになってきて、とても楽しいのですが、力がついていくかという、率直には自分ではよく分かりません。
- 学習方法としては良いと思うが、そのまま成績に反映するのは、公平な成績が最終的につけられるとは思えない。たとえそれが微妙な値であっても。
- その場で考えるから、けっこう印象に残るしすごいと思うけど、端に座ると全然みえなくて・・・。グループを5つくらいにわけたら、もっと積極的に参加できていいかもしれないです。
- グループで1つの答えを導き出すのはいいと思いますが、競い合いは当たらないグループがあきらめてしまうことがあると思います。
- 自己紹介した次の週も確認の意味で自己紹介したらよい、仲良くグループ活動が行えると思います。
- 「～しました」などの文法を表すカードは、日本語訳を入れられない方が、勉強したことを覚えやすくなるかもしれないと思いました。
- グループワークにも良さがあると思うが、1グループの人数が多すぎて、参加しようとしてもうまく参加できない。どうしても点数に影響すると言われると、できる人に頼ってしまう傾向がある。
- グループでやると考えなくなることがあるから気をつけたいです。
- グループ学習は楽しいが、グループの人数が多すぎると慣れるまで協力するのが大変だった。
- グループ学習は悪くないと思うが、記憶に定着しにくいように思う。

- グループ学習の時間よりゆっくり文法を説明してほしいです。
- もう少し少人数でのグループにしてほしいです。

### 13. まとめ

今回「グループによる学習」を韓国語の文法授業に取り入れておこなってみて、グループのメンバー編成方法、フラッシュカードの数と大きさ、成績に反映する方法、能率の悪さなど、グループによる学習活動内のありかたについて改善すべき点は多々あるものの、文法事項の習得にはある程度の効果があるとの感触を得た。また、「グループによる学習法」は教室を活気づけることに貢献する傍ら、ゲーム感覚で楽しく友達と協力しながら自発的に学習できると実感した。こうしたことから、「グループによる学習」を韓国語に対する教室での授業に取り入れる意義は大いにあると思われる。

しかし、「グループによる学習」は学習意欲の向上と授業の活性化には効果がある学習法であるが、気をつけなければならない点がある。それは、学習者の自由コメントにもあったように、学力の保障である。つまり、この学習法により学習者の学力がよく伸びていることが保障されなくてはならないのである。今後、本学習法での改善すべき点と学力保障の問題について、継続して取り組んでいきたい。

### 参考文献

- Barkely, E. F., Cross, K. P., & Major, C. H.(2005). *Collaborative Learning Techniques: A Handbook for College Faculty*. (安永 悟 (監訳) (2009).『協同学習の技法—大学教育の手引き』ナカニシヤ出版).
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. (米山朝二・関 昭典 (訳) (2005).『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』大修館書店).
- 浅野 誠 (2002).『授業のワザ一挙公開—大学生生き残りを突破する授業づくり』104-127, 大月書店.
- 岡坂慎二 (1991).『グループ学習の技術 (教育技術文庫)』明治図書出版.
- 佐藤学 (2013).「学びの共同体の改革=これからの課題」(学びの共同体・夏の合宿研究会 in 伊東 2013 年 7 月 26 日) <http://manabi.justhpbbs.jp/13-S-1.pdf> (2013 年 12 月 24 日検索).
- 関田一彦 (2004).「協同学習のおすすめ—互いの学びを気遣い合う授業を目指して」杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (編).『大学授業を活性化する方法 (高等教育シリーズ)』57-106, 玉川大学出版部.
- 高橋寿夫 (2008).「授業の活性化に向けて—グループによる学生参加型授業の実践的考察—」『関西大学外国語学部 外国語教育フォーラム』7,23-34.
- 館岡洋子 (2005).『ひとりで読むことからピアリーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東洋大学出版会.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005).『ティップス先生からの7つの提案<教員編>』

名古屋大学高等教育研究センター.